

異世界生活、なんて楽しいんでしょう(白目)

おツル三等書記官

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ハイハイ異世界異世界って思ったそこの貴方！

…そうです異世界転移です…

まあ1度は書いてみたかったもの、仕方ないね、

イチャコラハチャメチャドツタンバツタンイチゴ味って感じにしましょうかね、

もしかしたら深夜のクソテンション故にR18になるかもだけどなった時はなった

時だネ！

目次

はじまりはじまり	1
街について五分でトラブルとかいうね、	6
事情聴取から始まる恋とかあるわけねー	
だろ！（超フラグ）	13

はじめりはじまり

朝起きて♪歯を磨いて♪あぁつと言うま交通事故ぐ♪

って感じで僕は若くしてこの世を去りました。なんでや

まあ現世にはあと残りは無かったからいいやつて感じなので楽になると思

??? 「あつあなたはまだ完全には死なないですよ？」

へっ?

??? 「阿頼耶識 神児なんともまあ厨二病みたいな名前をしたあなたはまだ死なないつ

て言つたんですよ！」

神児「おいおいしれつとdisるなよ、しゃーないだろ親の付けた名前なんだから。」

??? 「里親も真面目に考えたんでしようけど、かなり面白いことに気が付かなかつたんですかね？」

神児「やめたげろよ…てかなんで両親が里親つて知つてんだ！てか姿見せやがれこの

野郎！」

??? 「んー仕方ないなあ。刮目せよ！輪廻転生を司る神様、ウロボロス様の降臨であー

る！」バアアン!!

神児「…で、それでなんで俺は死ねないの？」シラー

ウロボロス「あー！何でそんなに驚いてないの!?!神様だよ!?!ねえ！なんでなの!?!」

神児「あー！うるさいうるさい！こんなことだろうと思つたし、話が進まんから姿見せろつて言つた迄の事だよ！」

ウロボロス「んー…なんかひとりで勝手にはしやいでる気分…まあいいとしよう、それで死ねない理由についてだけでもね、なんと！阿頼耶識 神児君が、転生人として選ばれたのです！」ドンドンパフパフワーワー

神児「…いや、普通に死なせて下さい。」

ウロボロス「なっ！なんでそんなこと言うんですか！」

神児「んー、異世界生活が上手くいかなかったら、つて考えたら死にたくなつたから。」ウロボロス「なんでそんなこと言うんですか！そもそもなんで上手くいかないつて思ってますか！」

神児「だつてさ？大体異世界転移話つて中世ヨーロッパみたいなのばかりじゃん！大人1歩手前で令和迎えた世代には現代文明が1ミリも無い生活なんて自殺行為そのものじゃあねえか！」

ウロボロス「んーなんともわがままな話ですが、言いたい事もわかる気がします…：そ
うだ！こうしましよう！」

神児「なんだ？死なせてくれるのか？」

ウロボロス「それは決してダメです。異世界転移して貰う先を私の力でちよちよいと
書き換えて、貴方が言う現代文明の物をその世界でもある設定にしましよう！」

神児「…それは確かに刺さるな、」

ウロボロス「オマケでハーレムの加護も付けてあげます」

神児「その世界行かせてください！」テノヒラマツハカエシ

ウロボロス「よし来た！それでは早速張り切って転生しましよう！」

そう言い放った胡散臭い女神様は魔法陣を俺の周りに展開し、

よくわからんルーン文字みたいな言語を発しながら祈りを捧げ、

その直後魔法陣が閃光を放った！

ウロボロス「はい！あと30秒で異世界転生です！転生後のアフターケアもバツチリ

なウロボロスチャンペンダントもお忘れなく！」チャラ

神児「…ネーミングセンス壊滅的だけど大事そうだから貰つとくわ」チャラ

ウロボロス「もお！失礼ぶっこきますね！それでは第二の人生を楽しんでねー！」

最後まで女神様なのか怪しいまま辺りは光で包まれ、その後落下感と共にワープゲー

トらしき穴から草原に向かつて

神児「いだばっ!!!」ドシヤア!

100点満点の車田落ちを決めた(わからん人は聖闘士星矢を読むんだゾ!)

神児「あんのクソ女神めえ：イテテ、ここどこだよ…」

ウロボロス「さっきのペンダントを馬鹿にしたお返しだよ!」

神児「ヌオオおおお!!!びっくりしたア!…って、ホログラムだこれ、すげえなあ、おい」

ウロボロス「そ!ウロボロスチャンペンダントからの光で私は投影され、この先の異世界生活をサポートするって訳だ。因みにサイズ調整がチェーンが通ってる金具のついで調整出来るよ」ホラココサ!

神児「あつほんとはすげえ、手のひらサイズまで小さくなるなあ、これの方が目立たないからこれで行こう!」

ウロボロス「それが一番いいと思うよ!…ではここからはまず、生活を安定させなければなりません、そこで…」

神児「待った!もしかして俺に勇者になつて魔王を倒してくみたいな事を言おうとしてんだろ?」ジトー

ウロボロス「君の性格上そう言うの嫌そうって考えたから、さすがにそれは回避させ

たよ、これから、あるお店がアルバイトを探しているから、簡単なナビを出すから、そこへ向かって貰うよ！」

神児「バイトか、それならここに来る前にやったりはしてたから大丈夫だ！早速ナビ出してくれよ、」

ウロボロス「りようかーい！それではペンダントをちゆうもーく！」

神児「ん？ペンダント…」

ピカア!!!

神児「わぁ！」ドテツ

ウロボロス「驚いた!?ペンダントがレーザーライトみたいに光って方向を示してくれるの！あつこの世界の人たちには見えないから変な目では見られないよ！」

神児「イテテ…でもまあへたなナビよりずっとわかりやすくていいな、そんじや、ゆったりと行きますか。」

こうして、主人公適正皆無な主人公の、異世界生活が始まる。

この先の未来はハッピーエンドになるのか、それとも…

神児「何しやがんだコノヤロウ！（デュオ・マックスウエル）」

ウロボロス「ふんだ！女の子に向かって下衆な事を言つた君が悪い！」

神児「いやそれはな？場を和ませたかつたからであつて…」

ウロボロス「もう一回喰らいたい？」

神児「すいません許してください！何でもしますから！」

ウロボロス「ん？今なんでもするって…」

割愛！

神児「ううつ、ひどい！女の子怖い…死にたい」ポロポロ

ウロボロス「フフーン！女の子は怒ると怖いんだから」ドヤア

何が起こつたか気になる方は別アニメでそれっぽい下りのシーンを当てはめながら

連想してね！

さてそんなこんなでとうとう街へと到着まであと少しとなり、ここでウロボロスはこう言いました。

ウロボロス「あつ忘れちゃいけないや、神児君、これを持っておいで！」() ? . . ω () つ
通行手形らしき物

神児「おお、異世界つぼさがやつとでできた。サンキューな」

ウロボロス「門に着いたら一旦このナビを切つてただのペンダントになつてこの世界

の旅人に扮するから、トラブルは起こさないでよー？」

神児「それはフラグなのでは……まあいいか、頑張るよ。」

その後ウロボロスの言う通り、ナビの光がフツと消えてただのペンダントに戻った。そして目的地の街への門へと差し掛かった。

門番A「生まれ、この街への通行手形はあるか？無ければ手続きをして貰う。」

神児「嚴重だなあ、ウロボロスから手形を貰ってなければ面倒臭い手続きしなきゃなのか。感謝するぜ！」これでいいでしょうか？」つ通行手形

門番B「ふむ、よし！この国へ歓迎しよう！ようこそ行商の中心街サンクロイド国へ。」

神児「ありがとナス」

門を抜け、眩しい光が晴れた先には……人で賑わい、街の住人の笑顔が絶えない、まさに思い描いた異世界生活がそこにあるかのような光景が広がる！

神児「はえ……すつごい。ここがサンクロイド国って言うのかあ」

ウロボロス「そう！ここが君に素敵な異世界生活を送ってもらうサンクロイド国です！」フフーン

神児「門番の人が言ってたけど、このサンクロイド国って行商の国らしいけど、色々な物が売ってるのか？」

ウロボロス「そう！この国、と言うよりこの世界はそもそも奴隷制度なんてない世界として書き換えたから、奴隷以外は基本何でも売ってるよ！」

神児「胸糞悪い話がなくて良さそうだ！よくし！待ってる俺の異世界生活、いい物語にしてやる！」

生きたからかに方向転換し歩き出す神児、だが勘のいい読者の皆様ならわかるであろう。コレがフラグであると：

大男「ダツ！痛てえなこの若造がア！」

神児「ガッ！どこ見て歩いてんだこのボンクラがア！」

真っ向から思いっきり大男とぶつかってしまった。

大男「てめえ！この俺に口答えしやがったなあ？ああん？」

神児「はっ！てめえが誰だか知るもんかこのウスノロ！」

大男「ぬおああ貴様また口答えしやがったなあ?!」

大男は完全にブチ切れ状態である、

そんな中彼の事を知ってる街の人は

住民達「やべえよやべえよ……」

と口々に呟いていた。そんなこともお構い無しに神児はまだ挑発を行っていく。

神児「おらどうしたよ？かかってこいよ玉無しヘナチン野郎が！」

ウロボロス「ちよっ、ちよっと？そろそろ辞めとこ？そして謝ろう？ね？ね!？」

ウロボロスがホログラム体の中懸命に神児の煽りを止めようとしてる中ついに、

大男「死ねえ！クソガキアア!!」ブン!

大男が拳を思いつきり神児へと振り抜いた！だがそれを神児は、

神児「だからウスノロなんだよバーカ（小声）」ボソッ

すかさず右手で振り抜いてきた手首を掴み、そのまま背負い投げの体制となり、拳の勢いを殺さずそのまま思いつきり大男を投げ飛ばした！

うああああ！ドガァーンガラガラ キャー！無法者が飛んできたわー！

神児「あつ、やつちまつたぜ」

ウロボロス「やつちまつたぜじゃないの！なんなのもう！紗倉まながSEX始めるよりも早くトラブル起こしてるじゃん！」

神児「懐かしいなあ紗倉まな、何回お世話になったっけ。」

ウロボロス「そんなことはいいから！今はさっさとここを去るよ！」

ウロボロスに促され、広場を去ろうとしたその時、

???「全員その場から動くな！」

城が存在する方向から女性の叫び声が聞こえるや否や、辺りは一気に静寂を取り戻し、皆が一斉にその女性へと視線を向ける、

??? 「この広場で乱闘騒ぎがあると通報を受けた、張本人は大人しく投降しろ！」

そう言い放った後民衆は口々に

「あれは、エレナ・クロイツ様だ！」 「エレナ様が来て下さった！」

「ああエレナ様は今日もお美しい……」

エレナと言う王国騎士の女性に対し歓声を上げた

エレナ「静寂に！ 投降しないのであれば、少し手荒な手に出させて貰うぞ。」

ウロボロス「ほら言わんこつちやない、よりにもよつてとんでもない人が来ちやつたよ？」 ボソボソ

神児「んーでも俺も頭に血が上ったとはいえやつた事の責任は取らんとな」 ボソボソ

ウロボロス「えつまさか……」

神児「すみませんでした！ 乱闘騒ぎの片わらの方です！ もう一人はあそこの花屋でのびてます！」 バツ！

ウロボロス「このバカあ……」

神児はこの後どうなるかも考えぬまま両手を上げ降伏の意を示しエレナに少し近づき近寄る

エレナ「ほう、潔のいい男だ、この街では見かけぬ顔だな、少し事情聴取と後始末の書類も書いてもらおう、我々と同行して貰えるかな？」

神児「今更すぎるでござるよ騎士団団長どの」

こうして嵐のような男はエレナが率いる騎士団に連行され騒ぎは収まった、
だが、ここから先のおもむきがとて不安なウロボロスであった：

ウロボロス「こいつ本当に大丈夫なのかなあ…」

事情聴取から始まる恋とかあるわけねーだろ！（超フラグ）

前回のあらすじ！

無事に街に着く！無事にトラブルを起こす！無事に捕まる！以上！

トントン拍子で異世界転移あるが起こった前回リアル時間に換算するとなんと紗倉まながSEXを始めた最短時間よりも早かった！

…すみません、言いたかっただけです…

でもそのうちトツプバッターのヒロイン（まだ候補）とのイチヤコラもそのうち書くので許してください何でも…

エレナ「さて、こちらまあらかな情報は聞かせてもらったが、一連の騒ぎの話をお聞かせてもらおうか」

エレナ・クロイツは椅子に腰掛け、机に組んだ両手を乗せ目の前の問題児、阿頼耶識神児に質問を投げかける。

神児「まあ簡単に言くと、初めて来たこの街でちよつと調子に乗っちゃってぶつかっ

ちやつた人に仮まれたので自己防衛で投げ飛ばした…つてところですかね？」

エレナ「ふむ、どうやらその男から聞いた話と殆ど内容は同じであるな、」

神兎「あらま、意外とあの犬男はもつと俺を悪く言ってるのかと」

エレナ「まあ私から言わせてもらえば喧嘩両成敗つてところではあるな。」

神兎「本当にすみませんでした」ペコリ

エレナ「聞き分けはいい方であるな、まあこの騒ぎで被害にあつた花屋の店主も、あそこまで華麗な背負投をあんな体格差でやってのけるなんていいものが見れた、と大笑いしながら店の弁償に関しては何わなと言つていた、変な店主に救われたな。」

神兎「(〇〇)出たらせつてーお礼言いに行かないと…」

エレナ「さて、一通りの話は聞いた、後は書類を書いておしまいだな、運が良かったな」

そう行つて書類を取り出そうと後ろの棚へとエレナが振り向いた瞬間、目の前の色彩が反転し、異様な光景のまま時間が止まる。

ウロボロス「ちよつと待ったア！」

神兎「うわびつくりした、なんなのさ、急に出てきて！」

ウロボロス「このまま書類書いて次もトラブル起こすんじゃないぞーみたいな送り出しされて終わり！みたいな展開に譲渡してないでしょうね!？」

神児「えっ？ダメだった？」

ウロボロス「ドアホー！ハーレムの加護の意味が無くなるでしょうが！」

神児「そいえばそんな感じの掛けてもらってたよな、…てかあれ自動発動じゃなかったんだ…」

ウロボロス「あつたりまえでしょ！魔法1つでPONとメモメロなんて出来たらそれはただの木偶人形も同じよ！」

神児「言い方はあれだがあなたがち間違つてはいない…」

ウロボロス「あくまでもこの加護は恋愛関係へのきつかけを爆発的に作りやすくしてくれて、…その他もろもろ有利になるのよ！」

神児「最後雑すぎかよ！…まあいいや、とりあえず目の前の女騎士様を口説けばいいのか？」

ウロボロス「そ！いくら加護があるからって言ってもひどい内容だと効果を示さない時があるから気をつけるのよ？」

神児「オーライ、阿頼耶識 神児、目標のハートを狙い撃つ！」

神児がそう言うのと辺りは元の景色に戻り書類を片手に持ったエレナがこちらに振り返った。

エレナ「さあ、この書類に必要事項を書いておしまいだ」

神児「あー、その前に1ついいかな？」

エレナ「なんだ？こう見えても私は忙しいのだが？」

神児「まあそう言わず、もし良ければだよ？君にこの街を案内してもらいたくないかなって思ったんだよね」

エレナ「…何をバカなことを、そんなもの他の者に頼めばいいだろう？」

神児「いやいや、貴方がいいんだよ！あなたが！」

エレナ「何故私なんだ？」

神児「だってさ？この街に来てばかりでまた変な奴に絡まれるのが怖くないわけがない、そこで貴方に頼みたいんだよ！」

エレナ「ふん！要は用心棒として、ということか…」フイツ

神児「それよりも俺の目的はアンタなんだ！」

エレナ「何度も言うが用心棒は…」

神児「俺はアンタが欲しいんだ！」

エレナ「…」

神児「俺はあんたを見た時から何か運命的な物を感じたんだ！口では言い表せない何かに！」

エレナ「ッ！ふざけるのも大概に」クルツ

神児「俺は本気だ！」ガシッ！

エレナ「ひやつ！」

神児「簡単に言えば一目惚れだよ…だけど、こんなにも自分がバカになったのはアンタが、エレナ・クロイツが初めてなんだよ！」

エレナ「ツツツ!!」

神児「こんなこと言うのも自分でもどうかしてるけど…俺の心をもっと踊らせてくれ、狂わせてくれ…」

ウロボロス「(うわあ…後で黒歴史になるやつやん…こんな絶対ドン引きして終わり…)」

エレナ「…いつ、いいぞ分かった！君の申し出を受け入れようじゃあないか…／／／／／」

ウロボロス「(うっそお!!あれで成功するの!?)」

エレナ「ただ、ひとついいか?／／／／／」

神児「言ってみてくれ、」

エレナ「…この書類をまだ書いてないだろ?、記入を、してくれないか?」

神児「あつ、」

この後めちやくちや書類書いた

ウロボロス「…神児って意外とそう言う才に恵まれてる？」